

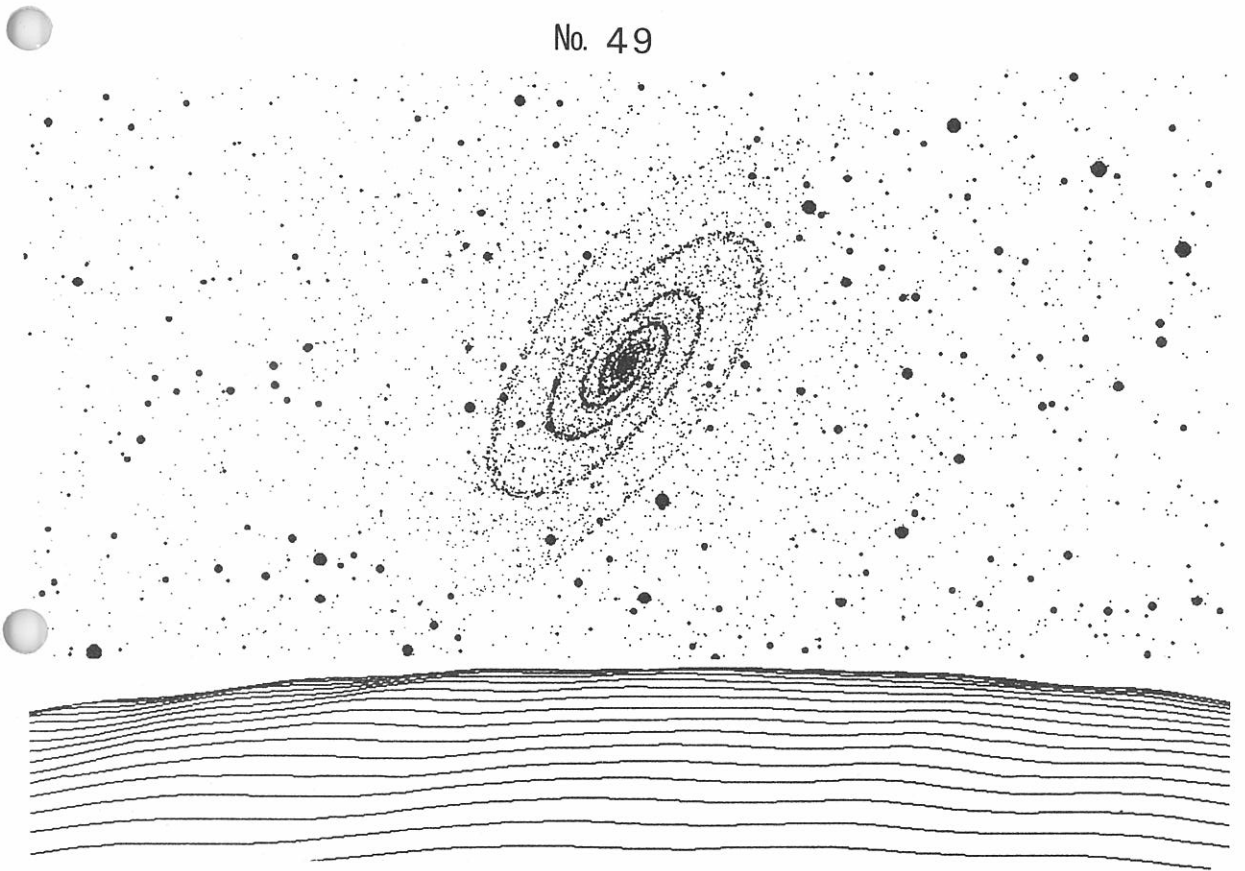
市川様

# 光学天文連絡会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

## 会報

No. 49



1988-6-13

光学天文連絡会事務局  
(大阪教育大学天文学研究室)

## 目次

I.	第11回総会報告	
I-1	1987年度会務報告	2
I-2	1987年度会計報告	3
I-3	1987年度活動報告	4
	(補足)・東京天文台の状況報告	7
	東京天文台内 望遠鏡WG 会合記録(10)	8
I-4	各ワーキング・グループ報告	
	1) 望遠鏡W. G. 報告	9
	2) 体制W. G. 報告	9
	3) 国際協力についての議論	9
I-5	1988年度委員の選出と承認	9
I-6	1988年度事務局の承認	9
I-7	1988年度活動方針	10
I-8	昭和64年以降の海外学術研究申請についての提案	11
I-9	岡山プログラム編成問題に対する具体的提案	13
II.	第49回運営委員会報告(1988年4月15日)	15
	京都大学2.3m光学赤外線望遠鏡建設計画の推進について	17
III.	運営委員会懇談会報告	18
IV.	体制W. G. 議事抄録(1988年1月26日)	18
V.	岡山ユーザーズ・コミッテイ会合報告(1988年5月19日)	19
	”天体の画像解析”にかんするする要望書	21
VI.	国立天文台発足準備委員会(第2回)メモ(1988年5月21日)	22
VII.	岡山・木曾プログラム相談会報告(1988年6月3日)	25
VIII.	観測申し込み書に見る諸外国の天文台の運用	26
IX.	会員移動	28
X.	掲示板	29
	1) 技術シンポ、シュミット・シンポ、岡山U. M. のお知らせ	
	2) 会費納入のお願い	

I. 第11回光天連総会報告

1988年5月17日午後、日本天文学会春期年会初日の講演終了後、近畿大学内の11月ホールで第11回総会が開かれました。出席者は45名で、議長は関宗蔵氏でした。

I-1. 1987年度会務報告(清水)

1) 総会・懇談会

第10回 総会	1987年 5月12日	京大会館	34名
懇談会	1987年 8月27日	岡山鴨方町民会館	80名
"	1987年10月19日	北大学術交流会館	30名

2) 運営委員会

運営委員懇談会	1987年 5月11日	京大宇宙物理会議室	14名
第44回 運営委員会	1987年 5月12日	京大会館	14名
第45回 運営委員会	1987年 6月27日	東大天文学教室	12名
第46回 運営委員会	1987年10月19日	北大理学部物理教室	9名
第47回 運営委員会	1988年 1月12日	東大天文学教室	15名
運営委員懇談会	1988年 1月27日	東大総合図書館	23名
光天連宇電懇合同運営委員会	1988年 2月26日	東京天文台	20名
第48回 運営委員会	1988年 3月10日	宇宙研駒場45号館	12名
第49回 運営委員会	1988年 4月15日	東大天文学教室	15名

3) 専門委員会

エ-ザ-ズ・コミッティ ミ-ティンク	1988年 1月12日	東大山上会館	26名
--------------------	-------------	--------	-----

4) ワーク・ショップ、シンポジウム

観測機器ワーク・ショップ	1987年9月25~26	東大総合図書館	46名
光天連シンポジウム	1988年1月26~27	東大総合図書館	62名

5) その他(関連行事)

天文学に関する技術ワークショップ	1987年8月25日	岡山鴨方町民会館	82名
岡山ユーザズ・ミーティング	1987年8月26~27	岡山鴨方町民会館	83名
シュミット・シンポジウム	1987年8月28日	岡山鴨方町民会館	67名
岡山・木曾観測プログラム相談会	1987年11月9日	東大天文学教室	16名

6) 会報・パンフレット

会報 No. 45	1987年 6月20日
会報 No. 46	1987年10月15日
会報 No. 47	1987年12月18日
会報 No. 48	1988年 3月28日

7) 会員名簿 1988年 2月15日 244名

8) 運営委員選挙 1988年 3月10日 118人投票

I-2. 1987年度会計報告(沖田)

収入

前年度繰越	49,890円
会費	479,000円
内 訳	
昭和61年度会費(一般 31人、学生 2人)	64,000
昭和62年度会費(一般 187人、学生 37人)	411,000
昭和63年度会費(一般 2人)	4,000
貯金利息	2,974円
合計	531,864円

支出

印刷費	114,600円
内 訳	
会報No. 45	27,000
会報No. 46	24,300
会報No. 47	20,000
会報No. 48	28,000
会員名簿・選挙関係	15,300
郵送料(会報等)	154,220円
封筒代	4,000円
会合費(光天連シンポ)	1,974円
宅配便(仙台→岡山)	2,400円
振替払込料金加入者負担	3,260円
会報等印刷代送金手数料	2,800円
合計	283,254円

次期繰越残高

248,610円

会費納入状況

昭和62年度分	昭和61年度に前納	9人
	当年度納入	224人
	未納	12人(内 海外出張中 6人)

会計報告の締めくくりに、清水事務局長より、シンポジウムの開催などにあって財政的援助を借しなかった、科研費総合研究の各代表者に対して感謝が述べられた。

運営委員会

1. 全般的経過

光天連第10回総会(1987年5月12日)において採択された活動方針に沿って  
東京天文台改組と全国共同利用体制

JNLT, 観測機器、建設予定地調査についての検討

JNLT完成までの観測・研究体制

のそれぞれの課題について、各ワーキンググループを中心として具体的検討が進展した。また、改組による国立天文台への移行が1988年7月1日に決まったことにより光天連の活動も新しい段階に入った。以下、主な事項について1987年度の経過をまとめる。

2. 研究体制

(1) 国立天文台(仮称)発足へ

東京天文台、緯度観測所、空電研の一部が国立大学共同利用機関としての国立天文台(仮称)へ移行する日程が具体的になり、87年4月から東京天文台内に改組準備調査室、共同利用関係では東京天文台改組準備調査委員会が発足した。光天連としては全国共同利用の観点から体制WG、光天連懇談会、光天連シンポジウムなどで議論を重ね、88年2月には宇電懇とも運営委員懇談会を持った。当面の問題は国立天文台運営の要となる運営協議委員および各種専門委員会の台外委員の選出法である。現在、研究者による直接選挙、分野毎の研究グループ(光天連、宇電懇、理論懇、――)からの推薦などいくつかの案が検討されている。

(2) 岡山、木曾の有効利用について

木曾観測所は東大理学部付属教育研究センターの付属施設として東大に残ることになったが、従来の共同利用体制は継続される見とらえてあり、その運営体制についても従来と余り変わらない方式が検討されている。

岡山天体物理観測所のプログラム編成は87年度から年2期制に移行したが、プログラムの混み方、特に暗夜の観測割当は深刻であり、再びレフェリー制が大きな問題となって来た。レフェリー制導入について若手有志からの要望書も運営委員長宛てに送られて来た。この問題は岡山ユースコミッティが中心となって検討を続け、光天連シンポジウムでも大きな議論となった。運営委員会はこれ迄の検討を踏まえ、当面の方針として運営委員会見解をまとめた。

(3) 大学における天文学教育研究の充実について

東京天文台の国立天文台への移行にともない、大学における天文学の研究教育体制をどのように整備充実するかが大きな問題となって来た。これについて天文学研究連絡委員会では検討を重ね88年1月28日に〔大学における天文学研究教育の充実について〕を採択し関係方面への協力を要請した。このなかには我が国の基幹となる大学の将来計画が列挙されておりその実現のために光天連としてもそれらの計画推進に協力していく必要がある。光学赤外線関係の計画については名古屋大理学部の1.2m赤外線反射望遠鏡設置計画および京都大理学部の2.3m光学赤外線望遠鏡建設を含む理学部付属天文台の整備拡充計画が含まれており、とくに後者については概算要求の段階まで計画が進んだので、4月15日の運営委員会において推薦を行なった。

3. JNLTの技術的諸問題

(1) JNLTおよび建設予定地

JNLTにかんする技術的検討およびサイトテストは東京天文台望遠鏡WGが中心となって進めており、その会合は88年3月2日で175回に達している。

JNLTについては能動支持機構の開発に成功、システムとしての工学実験に移りつつある。ドームの構造についても熱的検討が進み仕様の改定が進んでいる。これらに基づいて望遠鏡の総合仕様書、調達仕様書、技術仕様書の文案の作成段階に入っている。

(2) 観測機器の検討

JNLTに付属させる観測機器の検討は望遠鏡WGが主体となっており、87年9月に〔観測機器ワークショップ〕を開催した。主な問題点は

i. JNLTの初期の観測装置の提案と検討

ii. JNLTの特徴を活かした独創的機器の提案

iii. 望遠鏡と観測機器とのマッチングの問題

などであり、関連研究者の広い参加による開発体制の整備が討議された。

(3) 国際シンポジウムの開催

国際的視野からJNLTの技術的検討を深めるために、1988年の秋に国際シンポジウム〔JNLT and Related Engineering Developments〕を開催することが提案され、現在その準備が進行している。1988年3月にFirst Circularが印刷配布された。

#### 4. 国際協力・海外観測

##### (1) 東京天文台とハワイ大学との折衝

サイトテストの結果、サイトを確定し、開発運用協定書(OSDA)の最終版を作成する段階に入っている。

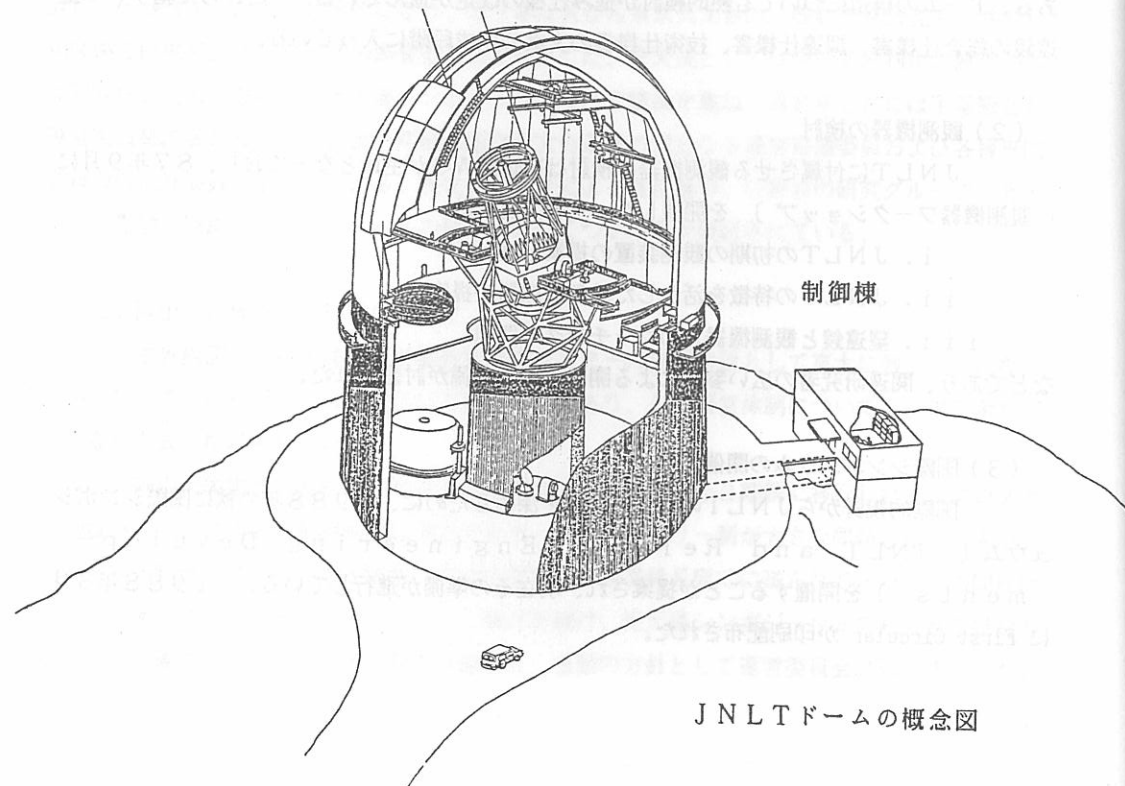
##### (2) MKO利用者委員会(Users Committee Meeting)

87年9月29/30日に開催された会議に日本からは古在、小平、前原の3氏が出席し、JNLTの現状を報告した。

ハワイ大学からUHと日本との協力という観点からUH2.2m鏡の観測時間の10%程度を日本側に提供するという提案があった。光天連としてはその提案を受けとめ有効に利用すべきであるという方向で議論が進行している。

##### (3) 海外観測

本年度も海外学術調査費などで多くの海外観測が実施された。



#### 1. JNLT 関係

- a. 諸調査を完了した。大型物輸送路の調査(道幅、路肩の強度)を行なった。山頂路については、OSDAに基き、ハワイ側の分担となる。また、主鏡の铸造および研磨の調査を行い、それぞれ3.5年、計7年の線が出ている。3ないし4m級のEMS(Engineering Model Study)を行なう予定で、現在その手順を研究中である。
- b. 能動支持システムの実験の第一期を終了した。単体機の試作に成功し、12機のシステムとしての性能試験をおこない良好な結果を得た。第二期の実験を計画中。
- c. サイトテスト結果の評価が出た。それに基づいてドーム設計の見直しをしている。ドーム内の熱源を排除するため、観測などは別棟の制御棟で行なうことになろう。(前ページの図参照)。また、CFHTでドーム内風速の実測を行なうことも計画している。
- d. OSDA最終版の協議をしている。ハワイ側はJNLTの観測時間の15%を要求している。これは、観測夜の15%ということで、目下Telescope Engineering Nightを何%にするかという点で決着していない。日本側は、TENとして初年(70%)、二年目(30%)、三年目以降(10%)を主張している。ハワイ側は、初年、二年目については、同意したが、三年目以降(flat running)に関しては、3%(残りの15%は年間54夜)内外を主張している。このことは、UH2.2m望遠鏡を日本側に使わせる件とも関係しており、現在交渉中である。
- e. 観測機器の問題では、UK及びUHと協力する方向で検討している。

#### 2. 国立天文台(NAOJ, National Astronomical Observatory of Japan) 関係

- a. 新組織への移行人事はほぼ完了した。現在、運営協議会メンバー、諸委員会メンバー、および、それらの委員会の規則の議論をしている段階である。
- b. 64年度概算要求では、JNLTが大型計画の最優先事項としてとりあげられる。そのほかでは、臨時事業費(光学赤外アレイ)、外国人客員経費、特別事業費(共同利用施設)がとりあげられる。
- c. 大望遠鏡建設調査準備委員会、および大望遠鏡建設調査準備室が東京天文台内で発足した。

東京天文台内 望遠鏡WG 会合記録 (10)

- 第160回 87年9月30日 鏡の基準点, 実時間制御の基本的な検討
- 第161回 10月 7日 ミラーサポート実験について
- 第162回 10月14日 ハワイユーザーズミーティング報告, ハワイサイトテスト報告-IV
- 第163回 10月28日 赤外仕様について-I, 実験鏡の支持方法の検討, 7.5m鏡の固有振動について, 鏡の風の影響について
- 第164回 11月 4日 事務作業会報告, シャックハルトマン装置の機械系設計, 主鏡への風の影響について, ESOメッセンジャーの紹介
- 第165回 11月11日 事務検討会に向けて
- 第166回 11月18日 赤外仕様-II, 仕様書について-IV, 経費見積りについて
- 第167回 11月25日 望遠鏡仕様について
- 第168回 12月 1日 コントラベス・フリーマンフォックスとの懇談
- 第169回 12月 9日 IRAF/SDASの現状, 光学仕様とMTF
- 第170回 12月16日 C とシーイングの関係
- 第171回 88年1月20日 技術検討会に向けて, 人員要求について
- 第172回 2月 3日 技術検討会報告, 光天連シンポ報告, 短期スケジュール
- 第173回 2月10日 OSDA検討報告, JNLT推進本部-三鷹-建屋, 画像処理センターについて
- 第174回 2月18日 ハワイ基地建屋, ランドサーベイ項目
- 第175回 3月 2日 光学仕様の宿題, 多天体分光器
- 第176回 3月 9日 88年度サイトテストについて, シャックハルトマン報告
- 第177回 3月16日 JNLT各焦点でのアクイジション等の装置, 能動支持実験及びそのスケジュール, 能動支持モデル実験報告, Image Qualityについて
- 第178回 3月30日 ESO VLT Conference報告, ハワイ報告, 能動支持制御実験の中間報告
- 第179回 4月 6日 ホログラフィー実験報告, 観測装置の検討
- 第180回 4月20日 第一次案検討会まとめ, 観測装置の検討会の報告
- 第181回 4月27日 技術検討会に向けて, ドーム建屋, シャックハルトマン実験報告, ESOメッセンジャーその他の紹介, 蒸着・洗浄装置の開発について
- 第182回 5月11日 ハワイ近況報告, シャックハルトマン実験の現状とまとめ

原則として水曜日 16:00 - 17:00

前回の報告は会報48号p12にある.

I-4. 各ワーキング・グループ報告

1) 望遠鏡W. G (田中濟)

昭和63年9月25・26日にワークショップを東大図書館で開いた。望遠鏡W. G. の議論の重点は望遠鏡本体から観測機器の方へ移ってきた。8つ提案されているなかから初期装置として何を選ぶかが問題である。JNLTふさわしいPIタイプの装置の提案が大切と思われる。また、JNLT国際シンポジウムの開催を提案した。

2) 体制W. G. (関宗蔵)

国立天文台内におかれる各種の委員会の委員の選出方法についての提案を64年1月の光天連シンポジウムにだした。そこで、今後検討するべき課題についても論じた。(シンポジウム集録 p. 53. を参照されたい)

3) 国際協力W. G.

今回の総会では、W. G. としての報告はなかったが、UH88"望遠鏡の観測時間を日本側が利用する場合のいくつかの問題点が議論された。

I-5. 1988年度委員の選出と承認

- 1988年度光天連運営委員の選挙結果が清水事務局長より報告され承認された。(運営委員選挙結果については会報No. 48, p. 13参照)
- 1988年度光天連運営委員長として小暮智一氏が推薦され承認された。
- 1988年度各ワーキング・グループ等の委員が推薦され承認された。(ワーキング・グループの委員については、本会報p. 15、運営委員会報告を参照)

I-6. 1988年度事務局の承認

1988年度光天連事務局長として定金晃三(大阪教育大学)が、また事務局会計担当として長田哲也(京都大学理学部物理学教室)が推薦され承認された。

1. 活動の目標

本年度は国立大学共同利用機関としての国立天文台（仮称）が発足し、全国共同利用を軸とする研究体制が新しい局面を迎える。また、それに伴って大型光学赤外線望遠鏡建設が具体的な第一歩を踏み出すべき段階となっている。このような状況を踏まえて本年度は次の点に活動の重点をおく。

- 1) JNLT計画の具体的進展を図る。
- 2) JNLTによる観測的天文学について内容を深める。
- 3) 観測機器の開発体制の確立に向けて努力する。
- 4) 国際協力を推進し、JNLTシンポジウムを成功させる。
- 5) 全国共同利用体制を整備し、各大学の光学赤外線分野の強化を支援する。

2. 活動計画

- イ) 総会、運営委員会の開催および会報発行
- ロ) シンポジウム、研究会などの開催

(1) 光天連が主体となって行なうもの

- A) 国際シンポジウム「JNLT and Related Engineering Developments」

1988年11月28日-12月2日（4日間）

東京大学山上会館

主催 光天連

東京天文台（国立天文台）

- B) 各種ワークショップ  
各WGが計画・組織する。

(2) 関連グループとの協力で行なうもの

- A) 技術シンポジウム
- B) シュミットシンポジウム
- C) その他

ハ) 各WGの活動

(1) 体制WG

- \* 全国共同利用体制の具体的検討
- \* 国立天文台の運営についての提言
- \* JNLTの運用体制の検討
- \* 大学における天文施設充実への支援

(2) 望遠鏡WG

- \* 観測装置についての検討
- \* 望遠鏡周辺施設の検討
- \* JNLTシンポの内容についての検討

(3) ユーザーズコミッティ

- \* 岡山プログラム編成と共同利用について
- \* 岡山ユーザーズミーティングの開催
- \* 観測装置開発体制の検討
- \* 国内の観測および計算施設の運用についての検討

ニ) PR活動

- \* JNLT計画の実現にはPR活動が重要。  
周辺および関連分野へのPR
- \* 国際的理解を深めるための英文パンフレット作成。

1. 背景

天文観測においては、ほとんどの望遠鏡が半年毎、あるいは3ヶ月毎に観測プログラムの採否を決定し、望遠鏡時間の割当を行うので、海外学術研究のように、1年ないし2年を単位とするような計画を申請する場合、やむを得ぬ不確定要素が導入されることになる。このため、天文観測のための海外学術研究では、過去にかなり頻繁に計画変更、メンバー変更などの煩雑な事務手続きをお願いしてきた。さらに、当初予定よりもたくさんの人が望遠鏡割当を獲得し、予算が大幅に不足し、増額をお願いするといったこともあった。文部省は天文観測の特殊性は充分認識しながらも、研究者サイドでもう少しきちんとした計画の下に運用できないのかということを非公式に指摘している。もともと、遺跡、農耕形態、風土病、言語、文化等の調査といった特定地域に長期間滞在するような研究形態に沿うように作られた「海外学術調査」は、近年理工系の研究計画の申請・採択が増えてきて、天文観測に代表されるような最近の多様な研究形態に必ずしもうまく適応できなくなってきた。このことを考慮してか、昭和63年度からは「海外学術調査」が「海外学術研究」と名称が変わり、しかもその中に、学術調査、がん特別調査、共同研究、大学間協力研究の4つのカテゴリーが設けられ、申請書の様式も大幅に簡略化された。年度内での調査・渡航日程の変更も大幅でない限り届け出形式が簡略化された。また従来は教務補佐員として雇い上げないと参加できなかった大学院生が、研究協力者という形で調査に参加する道が開かれた。さらに、昭和64年度からは、分担者としてなら複数の海外学術調査のメンバーとなることが可能となった。従来これは厳密に禁止されていた。

このように、文部省では多様化する研究者からの要求に答えるべく多大の努力をしている。このことは、海外学術調査総括班の主催する、研究代表者を対象とする連絡会での文部省担当者の発言によっても確認されている。（学術月報昭和63年1月号に掲載された文部省国際学術課調査官 本間誠雄氏の記事《「海外学術研究」について——制度改革の背景と概要——》を参照）

こうした背景を踏まえて次の提案をしたい。

2. 提案

- (1) 光・赤外線関係の観測のための海外学術研究を一本化する。
- (2) 計画調書作成段階で、当該年度に海外望遠鏡の利用を計画している人は、その計画書あるいは望遠鏡への申し込み申請書を代表者に送る。代表者は申請のあった人全員を分担者として海外学術研究を申請する。
- (3) 申請が採択され、交付金額が決まった時点でもし全計画に支出することができない場合は、なんらかの調整を行う。

### 3. 提案理由と問題点

(1) 従来は、分担者のメンバーシップを限ることで実質上金額の調整が行われていたが、そのために分担者になることがある種の権利を生じるようになるという側面もあった。これは分担者の重複禁止、変更の難しさなどの外的要因にもよっていた。今回の提案は、機会を全員均等とし、できるだけ多くの成果があがるように考えたものである。ただし、一本化するということでは、他の特色ある海外学術研究の申請を排除するものではない。コミュニティ全体として、海外望遠鏡を使う経験を若い人にも幅広く蓄積して貰うには、派遣するメンバーの組合せなどにそれなりの配慮をするのが良いことであろう。このためには、全体の計画をまとめて把握できている方が良く考える。

(2) 海外学術研究の実績を岡山をはじめとする国内望遠鏡のプログラム割当に反映させることも可能になる。

(3) どのような調整を誰が行うかについては十分な議論が必要であろう。研究代表者をお願いするのはあまりにも負担が大きいと思われる。光天連のユーザーズコミッティあたりで考えて戴けると有難い。

(4) そもそも研究活動は個人の自発的意志で行われるのが理想である。研究者が自発的に作った団体とは言え、光天連あるいは同様なコミュニティが研究者の申請にどこまで関与すべきかは基本的な問題として残る。

(5) 一本化したとすると、もし採択されなかった場合、ダメージが大きい。

昭和64年度については、時間切れで十分な検討ができませんでしたが、65年度からの申請については、国立天文台の発足という新しい要素もありますので、それも含めて本提案について会員の皆様のご意見をお聞かせ戴きたいと思っております。

以上

### II. 岡山プログラム編成問題に対する具体的提案

京都宇宙物理若手有志

#### はじめに

我々は、運営委員会の提出された1988.3/10付の”見解”に対応して、若手としての意見を形成すべきだと考え、京都宇宙物理若手有志内で議論を重ねてきましたが、前回の総会に於て以下の提案を行いました。この提案は、従って、全国の院生の意見をまとめたものでないのは勿論、我々の内部においても必ずしも全員一致している訳ではないことをコメントしておきます。

#### 提案の前提

プログラム編成問題を188cm望遠鏡に閉じた問題として考えずに、日本の光、赤外の全体的発展を目指す中で位置付けるべきである。

#### I. 188cm観測申し込み以前に考えられる対策

##### 1. 国内他望遠鏡に新機能をつける

例えば、木曾でのCCD撮像、室平でのCCD撮像、分光、測光、岡山90cmに撮像機能、IR望遠鏡の利用、開発、国内中口径新設等が挙げられます。これら全てを行うことは不可能ですから、communityで議論の場を持って、選択、実行してゆくべきであると考えます。また新機能増強に伴い、データ処理システムの強化、全国化も必須の課題となりましょう。これらの仕事を行うに当たってはPDF、院生の参加が必要であるし、またそうすべきだと考えます。

##### 2. 機器開発体制の調整を行う

現状では、可成り多くの機器が立ち上げられようとしています。完全には完成しないままのものが結構あるようです。そこで、あれもこれもと立ち上げないで、絞り込んで行ってはどうかということです。一定の場(機器開発委員会?)で、何を、誰が、いつまでに結果の発表をするかといった議論をし、それに集中してゆくような体制を考えています。この様な開発にも、PDF、院生の参加が必要となりましょう。但し、ここでいう開発とは観測所のもののみに限るのかどうかという問題点もあります。

##### 3. 海外望遠鏡に当たっている期の188cmへの応募を遠慮する

これにはいろいろな意味での遠慮が考えられます。単に遠慮するだけというのから、海外出張の為岡山に來れないといった愚は避けるべきといった意見、他にデータ処理能力が十分あれば応募してもよい、等です。

##### 4. 観測所での請負観測

現状では、ある天体のimageを一枚撮りたいとか、スペクトルを一本欲しいという場合でも、天候の事を考えて2-3日の申し込みをせざるを得ないという面があり、マシンタイムがもったいないという感じがします。そこでこの様な小プログラムは、観測所タイムをとって処理するのはどうかということです。勿論人手、需要がどのくらいあるか等の問題もありますが、検討してもよいのではないかと考えられます。

(田太：責文)



## II. 観測申し込み以後に考えられる対策

### 1. 申し込みの交通整理を行う

プログラム委員会（おそらく光赤外専門委員会の下組織）において以下の視点をもってプログラムの交通整理を全国的視野に立って行うというものです。

#### ① Technical feasibility

② 他望遠鏡にまわせるものはそちらに（この為には、I.1が必要）

③ データ処理を行う事が先決と判断されるような申し込みはreject（やはりI.1が必要）

④ 観測の特徴によってプログラムの割付をかえる（例えば、3日/年 x 2 → 6日/2年）

⑤ I.4の体制があれば、請負観測の可能な小プログラムはそちらにまわす尚、この様な交通整理の為には現状の申し込み用紙では不十分なので、天文学的意義、観測目的、狙い、技術的要求、その可能性等について詳しく記述する様な形式にすることが必要と考えます。（その為にはステータスレポートが必要）

このような方策を実行し、2-3年様子をみてはどうかという立場の人もいますが、scientificな意義の評価を行うシステムをつくっておくべきだという意見もあります。また、上の方法だけでは實際上プログラムの混雑は解消されないと予想する人もいます。そういう訳で、上記の交通整理に加えてreferee制の導入も提案しておきます。

### 2. Referee制

具体的なシステムとしては次のようなものが考えられます。

① 観測申し込みはプログラム委員会へ

② プログラム委員会は、申し込みをrefereeにまわし、refereeはscientificな面の評価を行う。（Refereeにはプログラム委員の併任も可、またtechnical feasibilityを評価の対象にいれることもある）

③ Refereeは、採点、コメントをつけて委員会に戻す。

④ プログラム委員会は、refereeの採点結果、技術的要求、観測の特徴、学位論文の為かどうか、分野、institute、人のバランス等を考慮して、平均5-6日/unit割り付ける。

尚、機器開発の為の時間は別枠とし、refereeを通さず、観測所または機器開発委員会（仮称）が申し込む。

### 要点

以上の諸方策は、今までに既に誰かが言ったもので、決して新しい解決策を示している訳ではありません。この提案の要点は、具体的対策の提案はほぼ終了したから、直ちにこれらの検討、決断の作業にかかるべきであり、また可及的速やかに決断したことを実行してゆくべき時期にきている、という主張をすることです。この様な検討決断を行う場としては、国立天文台内の委員会、光天連のふたつが考えられますが、光天連の存在意義を考えると、後者で行うのが望ましいと思われまます。（文責：太田）

## II. 第49回運営委員会報告

日時： 1988年4月15日

場所： 東京大学理学部天文学教室会議室

出席者： 小暮、小平、平田、安藤、田中W、磯部、清水、渡部J、兼古、舞原、田村、関、西村、佐々木、定金

### 議題

#### 1. 諸報告

1) 東京天文台内望遠鏡W. G. の報告が小平氏よりあった。主な内容は、昭和64年度概算要求、能動支持機構システムの工学実験、ドーム構造の改良案、鏡材、研磨、エンジニアリング・モデルの具体案、観測装置の第一次案、OSDAの最終案などであった。

2) 改組関係 3月18日に国立天文台設立準備会が開かれ、台長候補に古在氏が、また企画調整主幹候補に平山氏がそれぞれ選ばれたことが報告された。各種委員会の規則案が順次審議されていることも報告された。

#### 2. 次期（1988年度）体制について次のように候補者を決めた（敬称略）。

- 1) 運営委員長： 小暮智一
- 2) 事務局： 定金晃三、長田哲也（会計）
- 3) 各W. G. および U. C. （○印 世話人）

望遠鏡W. G. : 田中濟(○)、舞原俊憲(○)、岡村定矩、平田龍幸、渡部潤一

体制W. G. : 関宗蔵(○)、大谷浩(○)、石田蕙一、小暮智一、若松謙一、舞原俊憲、安藤裕康、兼古昇、佐々木敏由紀、尾中敬、能丸淳一、泉浦秀行

国際協力W. G. : 1988年度は設置せず。

U. C. : 谷口義明(○)、定金晃三(○)、山下泰正、石田蕙一、西村史朗、前原英夫、平井正則、若松謙一、斉藤衛、兼古昇、田村真一、佐々木敏由紀、太田耕司、市川伸一

### 3. 1987年度活動報告、1988年度活動方針について

総会に提出する活動報告の案については、4月中にまとめるので各委員から意見を寄せてほしいと、小暮委員長より要請があった。

体制W. G. からは関氏のメモが示された。国立天文台への移行後必要となる専門委員の選びかたに関しては、光天連会員による選挙を行う方針だが、さしあたりは選挙をせず、運営委員会で推薦する方向を総会に提案することが承認された。

体制W. G. の活動報告は田中済氏が行うことになった。

国際協力W. G. からは報告すべき内容なしとの発言があった。

1988年度活動方針については小暮氏よりメモが示され、議論の後承認された。

### 4. 総会準備について

1988年度総会は5月17日(学会初日)講演終了後、近畿大学内で行うことを確認した。総会の議長は関宗蔵氏に依頼することを決定した。

### 5. 岡山の観測プログラム編成問題について

3月10日の運営委員会で出された方針(会報No. 48, 10ページ参照)を巡って議論がおこなわれた。方針の②と④を両立させる具体案について意見を交換した。暗夜のプログラムの取扱、海外での観測との関連、91cm望遠鏡の活用法、観測申し込み書の様式の変更、などの点が話題になった。実際的には、ユーザーズ・コミッティで具体案のたたき台を作り、それをもとに運営委員会で検討することになった。

6. JNL T国際シンポジウムの準備状況について磯部氏より報告があった。

### 7. その他

- a) 来期(7月から12月)の岡山・木曾の観測プログラム相談会について  
相談会は5月末か6月初めに行われる予定だが、これが現体制での最後の相談会になる。光天連からの推薦メンバーは、舞原、若松、定金の三人とすることを決めた。
- b) 京大理学部の2.3m望遠鏡建設計画についての説明が小暮氏より行われた。  
光天連として、この計画の推進を支持することをきめた。(次ページ参照)

### 京都大学 2.3 m 光学赤外線望遠鏡建設計画の推進について

1988年 4月15日

光学天文連絡会  
運営委員会

光学赤外線天文学研究者の全国的組織である、私達、光学天文連絡会では、我が国の光学赤外線天文学の飛躍的發展を目指して、現在、ハワイ島マウナケア山頂に7.5m鏡建設計画を推進しております。この望遠鏡は口径、性能ともに世界第1級のものであり、1990年代後半の完成を目指しております。この望遠鏡により成果を挙げるためには、基礎的開発・観測、研究者養成のために国内支援設備としての中規模望遠鏡の充実が必要不可欠であります。この種の望遠鏡としては東京大学東京天文台(本年7月より国立天文台に移行)の1.88m鏡が我が国最大の望遠鏡として全国的に利用されておりますが、この望遠鏡は利用者が多く、既にオーバーロードの状態になっています。

京都大学理学部において計画されている2.3m光学赤外線望遠鏡は京都大学における天文学の研究と教育の発展にとどまらず、7.5m大型望遠鏡を頂点とする日本の観測的天文学を發展させる上で、重要な意義を持つものであります。光学天文連絡会は全国的視点に立ってこの計画を支持し、その早期実現を期待致します。

### Ⅲ. 運営委員会懇談会報告

日時： 1988年5月17日 19時30分 より 20時30分  
場所： 近畿大学11月ホール内  
出席者： 小暮、平田、関、岡村、磯部、田中、小倉、定金、長田

懇談テーマ： 64年度海外学術研究の取扱について

総会における岡村氏の提案（本会報11ページ参照）をもとに、64年度の申請の具体的な方法について協議した。一本化の方向をとった場合に予想される問題を吟味した。今回の場合は完全に一本化すると、一人の代表者に過大な負担がかかること、また、リスクがあることなどから、2グループに分ける方向をとることにした。具体的な代表者名、グループ毎のテーマなどは19日のユーザーズ・コミッティの席上で決めることにした。

### Ⅳ. 体制W. G. 議事抄録

日時： 1988年1月26日 17時30分 より 20時  
場所： 東京大学 天文学教室  
出席者： 安藤、石田、泉浦、太田、大谷、小平、佐々木、関、舞原

#### 議事

1) 『国立天文台各種委員会のうちで、光天連との関係が特に強いと思われる委員会の委員選出方法』について、世話人（関）の私案をたたき台にして種々議論した。論点は①研究系と研究専門委員会の対応に関して（研究分野の独自性の尊重と運営組織のかねあい）、②光学赤外・太陽研究専門委員の選出に当たって、光天連の意向をくみとる具体策；直接選挙か間接選挙か／選挙権・被選挙権／投票方法の具体案／投票に伴う実務作業を誰が引き受けるか・国立研か光天連かetc、③小委員会の種類と任務、④各種委員会と光天連の関係（特に国立研が軌道に乗っての後）などであった。結局、別紙（光天連シンボ集録 p. 53参照）のような形でもとまり、光天連シンポジウムで会員に提案することとなった。

2) 『UH88" 望遠鏡をふくめて、今後の（主として国内における）観測研究体制については、もう少し時間をかけ、情報を集めてから討議することとした。

追記： 翌日（1月27日）のシンポジウムにおいて、西村氏（東京天文台）から指摘のあった『データ解析センター』との関連で、『理論共通系研究専門委員会』へ、光天連として関わってゆくこと、また、京大望遠鏡計画への支援をする必要性がある。（文責： 関）

## ユーザーズ コミッティ 会合の報告

5月19日に天文学会春季年會会場内において、今年度の第1回ユーザーズコミッティ（以下UC）が開かれました。

(1) 出席者： 市川伸一、太田耕司、佐々木敏由紀、定金晃三、平井正則、西村史朗、若松謙一、谷口義明（以上UCメンバー）  
青木哲郎、磯部秀三、岡村定矩、川上 肇、小暮智一、辻 隆、西田 稔、平田龍幸、山崎篤磨

(2) 議事：

#### 1. 来年度の海外学術研究の申請について

研究分野別とし、星関係は 辻 隆（東大）、銀河関係は 西田 稔（京大）の両氏が代表者となる事を承諾された。

#### 2. 岡山ユーザーズ・ミーティングについて

世話人： 前原英夫（東京天文台・岡山）、山崎篤磨（東大・教養）、及び青木哲郎（東大・理）の3氏に決定した。

日程及び場所： 今年度は、シュミット及び技術シンポジウムと日程を合わせて8月下旬に東京で開かれる事になった。

テーマ： (1) 188 cm 鏡の制御系改修の報告  
(2) 観測機器の開発現況報告  
(3) 検出器の総合評価  
(4) カセグレン焦点における分光観測の今後  
(5) 運営及びプログラム問題  
(6) 91 cm 鏡及び堂平観測所等を含めた今後の環境の整備

### 3. 観測データの解析に関する問題

若松謙一氏（岐阜大）より上記の問題に関して次のようなコメントがあった。  
「地方の研究者は観測データの解析に困難を伴う事が多い。理由は計算機及び解析ソフトが整備されていない事にある。海外で良いデータを取ってきても解析が遅れ、成果の迅速な公表に支障を来す事になる。そこで、国立天文台の発足に当たり、データ解析センターの充実を強く望む。光天連のサポートにも期待したい。」

### 4. プログラム相談会について

6月3日に岡山・木曾プログラム相談会が開かれる。光天連の代表として  
定金晃三、若松謙一、及び平井正則の3氏がこれに出席する事になった。

### 5. UCの今年度の検討項目

1. 国内観測設備の有効利用
2. プログラム編成問題
3. データ解析システムに関する問題
4. 機器開発体制
5. 海外学術研究関係の連絡
6. JNL T計画のサポート

尚、5.については今年度は海外協力ワーキング・グループを設置しないため  
UCが受け持つ事になった。

昭和63年5月27日 谷口義明、定金晃三

<<<<< お知らせ >>>>>

次回のUCは岡山UMの直前に東京で開催する予定です。

## ”天体の画像解析”にかんする要望書

近年、CCDやPDSなどの近代的な観測・測定機器が貴天文台の研究者らの努力によって次第に整備され、多量の二次元天体画像データを取得できるようになって参りました。また、海外学術研究費等により、ハワイのマウナ・ケア天文台はじめ世界各地の天文台で得られた二次元の観測データも急速に増え続けており、天体の画像解析が天文学研究にとって極めて重要な要素になって参りました。この情勢に対処するため、国立天文台への改組に際し、貴天文台で「天文学データ解析計算センター」が設置されるはこびになりましたことは、私共にとり大変心強いかがりです。

二次元画像データの処理は単にCPUやイメージ・ディスプレイなどの高価な情報処理機器の整備のみでなく、それを動かす多種多様なソフトウェアの開発・充実も必要不可欠であります。地方の研究者にとっては、それらを各自で整備することは不可能に近いのが現状です。この画像解析の問題こそ、地方の天文学研究者にとって共通した最大の悩みのひとつであります。私共もこの問題を解決すべく努力いたしておりますが、問題があまりに大きすぎ、国立天文台からの援助に期待するところが大きであります。そこで、国立天文台の発足に当たり、私共は画像解析関係、とくに以下の四項目の早期実現を強く希望いたしております。

何卒よろしく御配慮いただけますよう、切にお願い申し上げます。

### 要望事項

- 1) 天文データの収集および画像解析の日本におけるセンターとして、その機能が充分発揮できるよう、国立天文台において「天文学データ解析計算センター」およびその関連研究部門の整備・充実をはかること。
- 2) その上で、全国の関連研究者の画像解析および関連した研究について充分な援助ができるよう、必要な体制を整備すること。
- 3) 国立天文台から地方や私立の大学に在籍する研究者に対して画像解析用ワーク・ステーション等必要な機器を貸出する制度について具体的に検討すること。
- 4) ハッブル・スペース・テレスコープ（HST）のアーカイバル・データの取得およびその画像解析ができるよう、必要な体制を整備すること。

兼古昇、関宗蔵、山崎篤磨、小倉勝男、水野孝雄、若松謙一、定金晃三、平井正則

（5月30日に上記の要望書が有志8人の連名で東京天文台長あて提出されました）

## 国立天文台発足準備委員会(第2回)メモ

昭和63年5月21日 上記委員会が東京天文台において開かれた。平山東京天文台長事務取扱、細山緯度観測所長事務取扱の挨拶の後、細山氏を議長として議事にはいった。以下その要旨を報告する。

### 1. 人事構想

改組準備室で用意した国立天文台研究系組織図(案)に基づいて、6研究系(光学赤外線天文学、太陽物理学、位置天文・天体力学、理論天文学、電波天文学、地球回転)、5観測所(乗鞍コロナ、岡山天体物理、堂平、野辺山宇宙電波、野辺山太陽電波)、3センター(太陽活動世界資料解析、天文学データ解析計算、水沢観測)ごとの教官配置の原案(教授22、助教授+講師42、助手85)(客員3名、公募8名)について審議し、文部省の国立天文台設置準備協力者会議に提出する案を了承した。尚、主要人事案は

国立天文台長	古在由秀
企画調整主幹	平山 淳(併任)
技術部長	森本雅樹(併任)

である。また、東京大学理学部天文学教育研究センターの人事案(教授3、助教授4、助手8、助手のうち1名は公募)も紹介された。

国立天文台公募人事として 助教授2(理論天文学、電波天文学)、助手8(光学赤外線天文学または岡山観測所1、太陽物理学1、位置天文・天体力学2、理論天文学1、電波天文学2、分野未定1)という案が予定されている。

### 2. 昭和64年度概算要求重要事項

基本方針と重要事項の案が示され議論された。概算要求は7月1日に国立天文台発足後直ちに文部省に提出される予定。主な事項をあげると次のとおりである。

#### (1) 研究部門の増設

64年度の重点部門は 超長基線干渉計天体物理、天文シミュレーション、サブミリ波天文、光学赤外線計測、光学赤外線観測(外国人客員)、精密位置計測(国内客員)である。下線が光学赤外線天文関係である。

#### (2) 付属施設の整備 —— 乗鞍関係

#### (3) 臨時事業

1. 光赤外線2次元撮像系の開発
2. 6m鏡による地球回転VLBI実験
3. 人工衛星と地上観測網による太陽フレアの総合的研究

#### (4) 共同利用研究施設運営費

このなかには各種運営費とともに特別経費として次の経費が含まれている。

- 銀河磁場の研究(岡山)
- 特異天体の測光(堂平)
- HSTデータ解析による高分解能観測(解析センター)

#### (5) 大型特殊装置設備費

1. 大型光学赤外線望遠鏡
2. 電波ヘリオグラフ
3. 太陽周期活動望遠鏡

#### (6) 特別設備費 ———— 全自動強度偏波計

#### (7) 事務機構の整備

国際協力主幹(仮称)設置  
管理部、技術部の整備

#### (8) 施設整備

- |        |                   |
|--------|-------------------|
| (三鷹地区) | 1. 研究実験棟          |
|        | 2. 共同利用研究員宿泊施設    |
|        | 3. 図書館            |
|        | 4. 天文学データ解析計算センター |
| (岡山地区) | 1. 共同利用研究員宿泊施設    |
|        | 2. 研究棟            |

#### 3. 台長および主幹の任期など

4. 停年 ————— 60才

5. 人事選考の手続 ——— 別紙資料の素案

#### 6. 運営協議員の選出法

7月1日に発足する国立天文台の運営協議員の選出にあたっては移行時ということ  
で次の案が了承された。

台外委員 ————— 現在の改組準備台外委員をそのまま推薦する  
(台外委員は会報No. 48, p. 11参照)

台内委員 ————— 研究系主幹6名、残り4名は台内で選出

任期は昭和65年3月まで(1年9ヶ月)とする。第2期以降の選出法については正式  
に発足後の運営協議員会で審議する。

#### 7. 規則類(案)

国立天文台運営協議員会議運営規則

国立天文台委員会および専門委員会規則

総合計画委員会

研究交流委員会

の各規則案が紹介された。議論は次回。

分野別専門委員会の委員選出には当該分野の意向が尊重されることになったが、天文  
台全体としての方針は未だ固まっていない。7月までに各分野からの委員の推薦があれば  
尊重される見とらしてである。

次回は第1回運営協議員会として7月6日に開催の予定。

(文責 小暮)

人事の進め方について

1. 運営協議員会

- ・空きポストが生じた時に発議し、一般論を議論する。
- ・空きポストがない場合でも、分野の強化について議論しておく。

2. 分野選定委員会

- ・企画調整主幹と教授会メンバーより選出されたもの及び台外委員
- ・必要な場合、台長が若干名を委員として補充することができる。
- ・2年任期の常置委員会（約10名半数交代、台外から2名程度）
- ・分野の決定を行う。
- ・公募か推薦かを決定する。
- ・推薦人事の場合、運営協議員会の承認を得て、各研究系・附属施設・技術部長よりの推薦を求め、候補者を決定する場合がある。

3. 運営協議員会

- ・分野選定委員会の報告を受けて、分野を決定し ①公募人事か、②推薦人事か、を決め人事選考委員会を発足させる。（複数ポストを扱うことあり）

4. 人事選考委員会

- ・台内より3名、台外より2名程度の委員を分野・ポスト等を勘案して運営協議員会が決定する。

5. 公募（研究系は、原則として公募とする。）

6. 人事選考委員会

- ・公募・推薦にもとづき、候補者を決定する。

7. 運営協議員会

- ・2/3以上の支持で決定する。

岡山・木曾プログラム相談会報告

1988年6月3日午後1時より4時半まで、東京大学理学部天文学教室で上記の相談会が開かれた。光天連からは、若松、平井、定金の三人が出席した。

(1) 最初に平山東京天文台長事務取扱の挨拶があり、ついで、山下岡山観測所長から、今年の第2期（7月から12月）の岡山観測所への観測申し込み状況について報告があった。それによると、申し込み件数は、188 cm 望遠鏡が47件、91 cm 望遠鏡が12件、太陽望遠鏡が12件（うち5件は夜間使用）で、次期の申し込み予定件数は188 cm 望遠鏡が19件であった。山下所長から、91 cm と太陽望遠鏡はほぼ申し込み通りにプログラムが組めるが、188 cm は10月と11月を中心になんらかの調整が必要との説明があった。次に、188 cm 望遠鏡について、観測装置別に仕分けされたタイムテーブルが、明夜と暗夜にわけて示され、それを基に調整の基本方針を決めたいとの意向が表明された。議論のたたき台として、天文台内の私的委員会で出された論点が山下所長から提示された。その内容は次の通り。

- ① 新しいディテクターの組合せが色々あるが、それらの使用は各々のアウトプットの評価をしてから続けてほしい。
- ② 2期制の運用のなかで、年間つうじて観測できない人がでないようにする。
- ③ 今年1回目の申し込みの場合は特に事情の無い限り受け入れる。2回目以上の場合は圧縮することもある。
- ④ 大学院学生またはO. D. の申し込みには少しウエイトをかける。
- ⑤ 装置類の交換回数はなるべく少なくする。

これを基にして検討した結果、調整をおこなえば最低3夜の割付けが可能であることが示され、上記の方針で調整することが相談会で了承された。その後、岡山観測所関係の報告が山下所長からあった。

(2) 石田木曾観測所長より、木曾観測所での研究課題、設備の運用、機器の整備・運用、運營業務等についての報告があった。又、現在進行中の特別推進研究の進捗状況についても報告された。その後、新体制へ移行後の木曾観測所の共同利用の問題等について意見が交換された。

(3) 近藤堂平観測所長より、堂平観測所の現況について報告があり、今後の共同利用について観測所側の希望が表明された。堂平観測所の91 cm 望遠鏡の使い方について意見が交換された。

(4) 続いて、来期以後のプログラム編成の方法、光学・赤外専門委員会の構成、専門委員会とその下のプログラム委員会、機器開発委員会の関係、それらと光天連の関係について議論された。最後に、画像処理関係の強化・充実に関する議論が行われた。（本会報21ページの要望書参照）

（文責 定金）

## 観測申込書に見る諸外国の天文台の運用

谷口義明 (東京天文台・木曾)

現在、光天連を中心として国内の光学天文台をより有効に運用するための議論がなされている。この議論の参考にするために諸外国の天文台の観測申込書を集め、外国での天文台の運用法を調べてみた。

多くの方々の御協力のおかげで、下記の14の天文台の観測申込書が入手出来た。

1. Kitt Peak National Observatory (KPNO/NOAO)
2. Cerro Tololo Inter-American Observatory (CTIO/NOAO)
3. National Radio Astronomy Observatory (NRAO)
4. University of Arizona Observatory (UAO)
5. Lick Observatory
6. NASA Infrared Telescope Facilities (IRTF)
7. University of Hawaii Observatory (UH)
8. European Southern Observatory (ESO)
9. Observatoire de Haute Provence (OHP)
10. Canada France Hawaii Observatory (CFH)
11. Dominion Astronomical Observatory (DAO)
12. United Kingdom Infrared Telescope (UKIRT)
13. Anglo Austrarian Observatory (AAO)
14. Mt. Stromlo & Siding Spring Observatory

これらの天文台の観測申込書から窺い知れる天文台の運用について以下に纏める。

- (1) 観測の申込みは年2回から4回の間であり、年2回が最もポピュラーである。各天文台の事情にもよるだろうが、天文学の進歩が早く年1回の観測時間割り当てでは対応できないこと、及び突発的天文現象への機敏な対応が行いやすいこと等が上記の数字に表れていると考えられる。運用に関し、フレキシビリティは重要である。
- (2) 申込書に観測のタイプを記入させる天文台がある。ひとつは、学位論文のためか或いは一般的な観測かを調べるもので、学位取得を目的とする観測には特別な配慮をするようである。NOAO、NRAO、ESOのような国立天文台或いはそれに準ずるところ、またLick天文台のように大学院の教育にも用いられる天文台ではこのような配慮がされている。もうひとつのチェック項目は、観測が短期的か或いは長期的なものかという点である。これも観測時間の割当ての際、参考になる要因であろう。UAOでは更にエン지니어リングの項目もあった。特筆すべきであろう。天文台毎に観測能率のアップに工夫を凝らしている。

(3) 当該天文台或いは観測装置の使用経験を問う天文台が約6割を占める。また、使用経験のある場合は当然成果の公表を問われる。また、これとは独立に申請者の過去2、3年に渡る論文リストを要求する天文台も3割を占める。使用経験については、観測計画が妥当か、或いはサポーターの必要性等を判断する材料になると思われる。成果の公表及び論文リストの提出の理由は自明である。天文台の経済的運用を円滑にする為には、プロダクティビティは潤滑剤である。

(4) 科学的意義については、どの天文台もA4判用紙に1、2枚(図・表があれば更にもう1枚)程度のものを要求している。当然のことながらこれらはレフェリーのレビューを受けることになる。観測時間の割当てを決めるコミティのメンバーも当然これを読むが、彼等は必ずしも全ての申請されたテーマに精通しているわけではないので、科学的意義は専門外の人にも背景や意義が理解できるように書くことが多くの場合要求されている。申請者は観測時間の獲得の為に論文作成に匹敵する努力を払っている。

以上の簡単な要約から、多くの天文台の運営方針は「成果をあげる」ことに重点が置かれていることが分かる。これは、ここで調べた天文台の多くが4メートル級の大望遠鏡を擁する国立或いはそれに準ずるものである事にも起因するだろう。

レフェリー制度がどの程度上手く機能しているかについては不明である。しかし、以下の様な例がある。NOAOでは、レフェリーの推薦に従っていると観測時間が不足するので、コミティのメンバーの採点が決定権を持ち、その主たる判断材料は申請者の経験と論文リストになっているという話がある。但し、経験のない大学院生は「学位取得のための観測」という配慮があるためスポイルされる事はない。ポスト・ドク以上の観測者は良いプロポーザルを書き、観測できたら速やかに結果を論文に公表するために必死になる、という状況になる。このような状況の是非については、日本では意見の別れるところであろう。

また、興味深いこととして、87年よりNOAOではディレクター預かりの観測時間が最大25%になった事があげられる。この時間は通常の科学的観測、新しい器械のテスト観測、及びメンテナンスに割り当てられるが、特に機器開発で遅れを取らない点に留意されている。天文台が有効に機能していくためには、不断的努力が必要である事が改めて認識される。

最後に、国内天文台の運用に関して簡単にコメントしておく。まず、第一義的に必要なのは天文台としてのポリシーを明確にする事である。これにより運用の方法が自ずと決まって来ると思われる。また先の光天連シンポジウムで、小平氏が「観測装置の高度化と観測テーマの増加が日本の光学観測に構造的変化をもたらしている」と指摘された。諸外国の天文台がこの構造的変化に柔軟に対応して来たのに対し、日本では必ずしも上手く対応して来なかった。この原因を究明し、適切な対応策を早期に実行に移す必要がある。光天連を中心にして更に議論されることを望む。

尚、観測申込書の資料が御入用な方は谷口までご連絡下さい。

IX. 会員移動

新入会: 吉田道利 〒606 京都市左京区北白川追分町 075-751-2111-3890  
 京都大学理学部宇宙物理学教室  
 小杉城治 //  
 花岡庸一郎 //  
 上野宗孝 〒606 京都市左京区北白川追分町 075-751-2111-3851  
 京都大学理学部物理学教室  
 菅井 肇 〒113 東京都文京区弥生2-11-16 03-812-2111  
 東京大学理学部天文学教室  
 宮脇亮介 〒811-41 福岡県宗像市赤間729 09403-2-2381  
 福岡教育大学  
 湯浅 学 〒577 東大阪市小若江3-4-1 06-721-2332-4062  
 近畿大学理工学総合研究所  
 黒田武彦 〒550 大阪市西区新町1-4-17 06-531-8131  
 大阪市立電気科学館  
 加藤賢一 //  
 川上新吾 //  
 西村昌能 〒612 京都市伏見区横大路向ヒ18 075-621-6330  
 京都府立洛水高等学校  
 Institut d'Astrophysique de Paris  
 98bis, Boulevard Arago,  
 F-75014 Paris, France  
 唐牛 宏  
 移動 寿岳 潤 〒259-12 神奈川県平塚市北金目1117 0463-58-1211  
 東海大学文明研究所  
 長田哲也 〒606 京都市左京区北白川追分町 075-701-5377  
 京都大学理学部物理学教室  
 Tokai University  
 Bording School in Denmark  
 丹後英治  
 竹田洋一 Institut für Theoretische Astrophysik  
 der Universität Heiderberg  
 Im Neuenheimer Feld 561  
 D-6900 Heiderberg 1  
 F. R. Germany

X. 掲示板

1) 技術シンポジウム・シュミットシンポジウム・岡山U. M. のお知らせ  
 標記のシンポジウム等をこの順序で8月23日より27日まで東京大学  
 教養学部(図書館視聴覚ホール)で開きます。  
 詳しくは、同封の案内をご覧ください。

2) 会費納入のお願い:  
 64年度分会費(一般2000円、学生1000円)を同封の振替用紙  
 にて納入方よろしくお願ひします。  
 もし、既にお払い頂いた方に振替用紙が届きましたら、失礼をおわびし  
 ます。

投稿歓迎

光天連会報は会員の皆様からの投稿を歓迎します。今年は国立天文台の発足に伴う体制上の諸問題、JNL Tの観測装置の問題、あるいは、岡山などの観測プログラムの問題などがクローズアップされています。会報はこれらに関する運営委員会などでの議論の報告にとどまらず、会員の意見交換の場としても活用したいと思ひます。特に、若手あるいは地方在住の会員の声をお待ちしています。紙面の許すかぎり掲載する方針です。

会員募集

光天連では新入会員を歓迎します。会員の身の回りに光天連の活動に関心をお持ちの方で、まだ入会されてない方がおありでしたら、入会をお勧め下さい。申し込みは事務局(定金)まで御連絡下さい。